

キャラクター名
神奈 愛志(かみな かなし)

プレイヤー名

シンドローム	ノイマン ノイマン	ワークス	レネゲイドビーイングB	カヴァー	刑事
オプション		年齢		性別	
覚醒	生誕	衝動	殺戮	初期侵食率	40 %
出自		経験		邂逅	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	28
肉体	0	0	1			1	行動値	8
感覚	0	1	0			1	(非装備時)	8
精神	6	0	0			6	戦闘移動	13
社会	2	0	0			2	全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃	1		RC			交渉		
回避			知覚	1		意志	1		調達		
運転:			芸術:			知識:			情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイム	消費
転生者	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
ヒューマンズネイバー	1		常時		自身			
効果: 衝動判定ダイス+LV								
オリジン:ヒューマン	1	2	マイナー		自身			
効果: エフェクトを使った判定の達成値+LV								
常勝の天才	7	6	セットアッププロセス		シーン(選択)			
効果: 攻撃力+[LV×4]								
勝利の女神	7	4	オート		単体		100%	
効果: 達成値+[LV×3]								
アドヴァイス	1	4	メジャー			交渉		
効果: C値-1、ダイス+LV								
天性のひらめき	2	4	メジャー					
効果: C値-LV 戦闘中不可								
風の渡し手	2	7	メジャー			交渉	100%	
効果: 対象を[LV+1]体に変更								
完全演技	★							
効果:								
写真記憶	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

神奈愛志という男の記憶が、彼の死と同じ瞬間にレネゲイドに感染。その後、彼の身体そっくりそのままに活動する沼男(スワンプマン)として生誕した。自覚はない。だが、ノイマンの能力により、理解してしまう。自分は死に、自分はもはや自分ではないと。神奈愛志は誠実な刑事だった。ならば、自分もそうだろう。今はこの記憶と、その誠実さだけが、自分が神奈愛志と同一である証明なのだから。

神奈愛志
かみなかなし。
真面目で誠実な刑事。成績は優秀。
凄惨な連続殺人事件の担当をしていたが、ある日を境に捜査から外される。
一度担当した事件を放り出すことはできない。その真面目さが仇になり、真相に辿り着いてしまう—それが人間ならざるものの犯行である、という真実に。犯人はそんな神奈を決して見逃しはしなかった。強力なブラックドッグのオーヴァードだった犯人は、雷で神奈を焼き殺した。黒焦げになったその身体は、確かに死んだのだ。炭となった身体と、そしてそこに残った残留思念は、残酷にもレネゲイドウィルスに触媒に化学反応を起こした。みるみるうちにその炭素の塊は変化を始め、やがて人の形を得た。—これが《リザレクト》という再生のためのエフェクトではなく《ヒューマンズネイバー》という"擬態"のためのエフェクトであると気付くのに、そう時間はかからなかっただろう—。とにもかくにもここに"沼男(スワンプマン)"は誕生した。
そして、誠実だった刑事の成れの果ては、「殺したい」と願ってしまった。神奈愛志の拳銃で、正確無比な射撃を犯人に見舞わず。まずは右足を。続いて左足を。動きを確実に止め、心臓に銃口を向け—「だめだ。」—「神奈愛志は誠実な刑事だ。」—「ここでこの引き金を引けば—」「自分はもはや神奈愛志であることは叶わない。」—その銃を、下ろす。
それでも、銃を向けた自分を許せなかった。既に人間ではない自分を受け入れられなかった。だから、警察を辞めるつもりだった。
—間山健司は、そんな彼に差し込んだ一筋の光だった。
その後R担に配属される。